

はじめに	4
<b>出来事</b>	
1 走るお姉ちゃん	8
2 往復航空券	1
3 御中	1
4 70マイルでチュツ	3
5 すつきりこん	8
ツリーングの思い出	2
1 2日半4500キロを走る	4
3 0	0
<b>心霊現象</b>	
1 悪霊との出会い	4
2 愛犬チツピー	5
3 ラスベガス	4
<b>アメリカ文化を考える</b>	
1 アメリカ人を考える	6
2 5つ星のブロードモアホテルの伝説	6
3 精神治療医	3
4 身障者社会	0
5 差別	7
6 家族	0
<b>悩める国アメリカ</b>	
1 コロンバイン・ハイスクール事件 (一)	8
2 コロンバイン・ハイスクール事件 (二)	6
3 護身用拳銃	1
4 ベトナム戦争	0
5 地下室の教会	0
6 同性愛・性転換と差別	1
	4



<ul style="list-style-type: none"> <li>1 人間とは</li> <li>2   ゆたんぼ</li> <li>3   ポランテア精神</li> <li>4   素直で身勝手な自分</li> <li>5   突然の訪問者</li> <li>6   信じるもの</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1 1</li> <li>2 2</li> <li>3 2</li> <li>4 1</li> <li>5 5</li> <li>6 1</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>1 チャレンジとチャンス</li> <li>2   借金</li> <li>3   心の余裕</li> <li>4   自分の流れが見えたとき</li> <li>5   この指とまれ</li> <li>6   年数と規模</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1 1</li> <li>2 9</li> <li>3 8</li> <li>4 8</li> <li>5 2</li> <li>6 7</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>1 日本人を考える</li> <li>2   ものごとの二面性</li> <li>3   横断歩道</li> <li>4   右に同じ</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1 1</li> <li>2 6</li> <li>3 6</li> <li>4 8</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>1 外人さん</li> <li>2   偽善と嘲笑</li> <li>3   節約と満足感</li> <li>4   美人</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1 1</li> <li>2 4</li> <li>3 5</li> <li>4 2</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>1 移民</li> <li>2   強制収容所</li> <li>3   戦争花嫁</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1 1</li> <li>2 3</li> <li>3 3</li> </ul>



著者紹介	2
あとがき	2
	2
	5

## はじめに

人生には、実にいろいろなことが起こる。「一人の人生は一つの小説である」と言った人がいる。十人十色と言われるように、同じ考えを持った人間はいないし、同じ人生をおくる者もない。それは、川の流れに似ている。その大小はあれ、流れが必ずある。時には干ばつに合い、干からびる時期もあるかもしれない。知らないうちに淀みに吸い込まれていたりすることもある。

「わらじのカウボーイ」を出させて戴き、勢いのようなものを戴いた。年の功というほどには達していないが、客観的に自分を見つめられる時期に入ってきたように思える。大袈裟に言つと、このちっぽけな、しかしながら底無しの人生の中で、何か自分の技量に合った使命のようなものが「わらじのカウボーイ」への道のりであった。そして、第2段に足を踏み入れさせて戴けることになった。



二十年以上も、このたまたま興味をひかれたオートバイと付き合い合せて戴くことによつて様々な人と出会い、時にはよくもまあという経験もさせて戴いた。このお付き合いは、私にとつては天から戴いたギフトだと思つている。またご縁があつて1983年に渡米し、コロラド州デンバー近郊に根をはつてから早十七年目になる。旅行業を通して多くの方と交流を持ち、一人の移民として成長させて戴いている。

この本を作成するにあたり、今では幼なじみのような付き合いをさせて戴いているYIEL電子出版部の山内昭・多佳子御夫妻にお礼を申し上げたい。そして日本にいる両親。息子の直哉、友之と元氣、パートナーの規子さん。大学時代からのオートバイ仲間の杉江利彦氏、加古洋二郎氏。アメリカ人の国民性を公平に分析し、議論してくれた友人のジョン・ガロブ氏とスコット・シヨープ氏。日系移民の先輩の皆さん。紙面ではあるが感謝の意を表したい。

日本からきた外国人としてアメリカに住み、長年の生活の中で感じたこと、考えてみたことなどをいろいろな角度から主観に主導権を委ねながらも独断で分析したものも紹介させて戴こうと今日に至つている。もし皆さんの感受性をくすぐることが出来れば幸いであり、また面白可笑しく読んで戴ければ嬉しく思う。

またCD-ROMにて出版ということで、書面の本では不可能な解像度の高い写真イメー

ジをくつつけることが可能になつているので、私の撮つたいろいろな写真をも楽しんで頂けるものと信じている。アメリカ中西部の魅力のほんの一部も紹介させて戴いている。そして、第1段「わらじのカウボーイ」と共にひとつの形となつて、皆さんの脳細胞に多少なりともダメージを与えられればこれにこしたことはない。

最後になるが、日米間の文化の違いや習慣の違いなどを取り扱っているものもあるが、これらは批判論の類ではなく、比較論に毛のはえたようなものであることをご理解戴き、ある意味では覚めた目で見て戴いても面白いと思つている。



マイルハイスタジアムとデンバーの高層ビル街

1999年6月30日

小池 清通